NGOとして緊急援助活動をスタート

ミャンマー難民支援——AMDA(アジア医師連絡協議会)

92/6

「今回のバングラデシュ領内でのミャンマー難民支援プロジェクトは、私たちAMDA（アジア医師連絡協議会）が来年5月に予定しているアジア多国籍医師団結成に向けて、よいパイロット・スタディになると思う」

小誌2月号『特集　国際保健医療協力・NGO』で紹介したAMDAが、現在大きな国際問題となっているミャンマー難民に対する緊急援助活動を開始した。

本レポートは、出発前日と第一次派遣団一時帰国後に行われた記者会見からの報告。多国籍医師団構想は、日本のNGOとして初めての試みだ。

アジア13ヵ国に支部を持つAMDA

Association of Medical Doctors for Asiaはカンボジア難民キャンプで活動した日本人医師・医学生がアジア各国の若手医師に呼びかけ、1984年にAMDAインターナショナルとして設立。日本人も含めたアジア人医師たちによるネットワークという医療専門の国際NGOだ。活動の特徴は、現在13ヵ国にある各国支部の医師たちが、自国内の医療活動に取り組みつつ、「アジアの友人」として対等な立場で、各国の民族的、宗教的風俗・習慣・文化の差に敬意を払った国際医療活動を展開することにある。現地の人々のニーズに合った永続性のある活動を行うために、当事国支部の医師たちを中心にし、ほかの支部は間接的に支援する形をとる。約400人の構成員は、韓国・台湾・フィリピンなどアジア13ヵ国に広がる。

「日本から現地に行って、日本の医療を行うという従来の医療協力のあり方ではなく、各国支部の行う活動を彼らの指導のもとにそこの国の人々のニーズに合った医療を行うのがAMDAの精神」（AMDAジャパン・小林米幸氏、国際医療情報センター所長）

今回もAMDAバングラデシュが活動の中心、AMDAジャパンとネパールが支援するものとなっている。

出発前日記者会見——4月9日(木)

軍事政権独裁によって少数民族の流出が続くミャンマーでは、バングラデシュにイスラム教徒が集団で流入。難民は3月中旬で1日1万人規模で増加しており、30万人に達する（『週刊エコノミスト』　4月14日号）。食糧や水の確保の困難さ、住環境の劣悪さから栄養失調・下痢を主体とする消化器性疾患の発生や、マラリアなど感染症の流布など緊急医療援助を必要としていると報道された。

今回、派遣団はバングラデシュ保健省発行の許可証で、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）との協力関係のもと活動する。既にAMDAバングラデシュのM.A.Jamil氏（バングラデシュより東大第1内科留学中）、AMDAジャパン・馬庭宣隆氏（バングラデシュ・チャンドラゴン病院）が先陣として入国。UNHCRや彼らからの情報を総合すると、国境沿いに点在する6つのキャンプにUNHCRと2つの国際NGOが活動中。AMDAもキャンプ内に移動医療キャンプを設営、緊急医療・予防接種・健康教育を行う。第一次派遣団の役割は、現地状況の把握と今後の活動のための関係づくりであると記者会見で報告された。

先陣に続いて第一次派遣団として出発するのが、AMDAバングラデシュ代表・Nayeem S. A.氏（東大第2外科留学中・31歳）、AMDAジャパン・津曲兼司氏（菅波内科医院副院長・35歳）と野田信一郎氏（25歳）の3人。それぞれが抱負を語った。Nayeem氏は、

「AMDAバングラデシュとしては初めての活動。日本に医学留学中のバングラデシュ人は100人近くいるが、その多くは将来アメリカに行ってしまう。私は、留学生仲間と〝絶対に国に帰るグループ〟をつくっている。将来のためにも、この活動は私の夢の第一歩」

と、プロジェクトに対する意気込みを語った。津曲氏は、

「難民がどのくらいの期間で帰れるのかわからない。一応、6ヵ月間活動を続ける予定だが、今後見通しがどうなるか現地の状況を把握してくる必要がある。後に続く参加希望者を広く求めたい」

と、日本の医療関係者の協力を呼びかけた。医学部在学中にAMDAの医学生版であるAMSA(Asia Medical Student's Association) と出会ったという野田氏は、

「国際医療協力をライフワークにしたい。だから今回、初めてフィールドワークを経験するという意味では楽しみ」

と、話した。

第一次派遣団帰国後記者会見——4月25日(土)

そして2週間後の4月25日、一時帰国したNayeem氏（16日帰国）、津曲氏（24日帰国）から現地の状況とAMDAの活